

海外出張の思い出（ナイジェリア編⑤）

高島敬明

1979年7月にナイジェリアに到着して7日目に現場で人身事故が発生したため翌8日目によりやく取れた15時発の飛行機でカドナに向かい、紆余曲折を経て何とかカドナの事務所に9日目の朝に到着したところから今号はスタートします。

安全管理室において事故の詳細な説明がなされました。127tクレーンは100m近くまでブームを伸ばし、エンジンと直結したドラムに巻かれた吊りワイヤーで4人乗りのゴンドラを吊って28mの高さで作業中でした。ところがクレーン運転手の不注意からドラムがニュートラルに入りブレーキが利かない状態で19mまで9m落下したのです。すぐ運転手が気づき緊急ブレーキを踏みましたがそのはずみで1名が外に投げ出され20m近く落下して即死とのことでした。その作業員は5日後には日本に向け室蘭まで帰る予定でした。S日鉄の関係会社の人です。そこまでお聞きし申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。すると関係者の方が、「高島さん、ご遺体にお参りいただけますか？ それから日本大使館の立会いの下、棺を封印しますから」と言われたので、大会議室の隅に置かれた棺に向かいました。日本航空のマークの入った棺が置かれていました。何でもJALの飛行機には何個か棺が常時積み込まれているようで、必要であれば海外の大きな工事現場に貸し出すそうです。お参りして中を見ますと真っ白な顔をしたご遺体が液体の中に浮かんでいました。「申し訳ありませんでした」と自然に声が出ました。「封印しますのでお立会いください」との声がかかりました。私が到着して確認するのを待っていたかのように。布ロープで何か所か結ばれ真ん中の紐の結び目に熱せられた蠟を流し、熱くなった焼きごてで封印していきます。その作業が終わると、どこへともなく運び出されて行きました。

14時か15時頃だったと思います。案内された大食堂で丸一日以上経っての食事を摂りました。食後、日本への報告のためサイト（カドナの現場）の日本人医師を訪ね、所見をお聞きしてから事務所に戻り



ぬかるみの中の現場

ました。そのころになると仕事の終わった当社の作業員が少しずつ私の周りに集まって来ました。作業員から事故の様子だとかイタリアの食堂業者が作る食事のまずさなどめいめいが私に文句を次々にぶつけて来ます。再度改めて50人くらいの作業員、下請けの作業員から一番不満の食事の話、事故の話聞き、当事者の運転手ともじっくり話をしました。彼は事故の当事者ですから現地の裁判でもあれば長い間この国に留まり刑事罰を受けますから必死に今までと同じ弁明を繰り返します。

23時くらいになりやっと今日の宿泊するコンテナハウスに引き上げて来ました。40時間くらい一睡もしないで睡魔を持ちこたえてやっとシャワーを浴びるまでになりました。さっぱりした下着に変えて片付けていたとき、茶色い点々が一面に付いているパンツを見つけました。心配になり翌日日本人医師の所に行きました。すると医師は、「多分極度の緊張が続いたせいで血尿が出たのでしょうか」とのことでした。日本を出発して以来10日間、ショッキングな死亡事故と環境の変化により緊張と不安でいっぱいになってしまったのです。

ベッドに横になると緊張がほぐれ、どっと疲れが出てすぐ寝込んでしまいました。朝5時頃でしょうか。何か外で呼ぶ声がしてコンコンとドアをたたいています。空耳だろうとまた横になりました。すると確かに涙声のような、押し殺したような声で誰か

叫んでいます。耳を傾けると、「係長、係長、帰してくれ、帰してくれ」と叫んでいます。聞きなれた今回一緒に来た大班長の T さんの声でした。この前まで当社の下請け会社から T さんの弟さんが派遣され、1 年間立派に務めあげて帰国したばかりでした。ドアを開けると倒れこむように入って来ました。もう一人 T 班長の腕を抱えた若い男も入って来ました。班長が心配になり付いてきたとのことでした。二人の話では、T 班長は現地に入って以来、食事が合わず段々と言葉も少なくなって痩せて行ったこと。技量は飛び抜けており皆が信頼していた大班長だけにそれとなく励ましていたが落ち込む一方であったこと。そして極限になったのがゴンドラからの転落事故を目の前で見たこと、のようです。

事故は聞いていた話よりかなり違っていました。事故発生の直後、班長は真っ先に駆け寄り何人かで抱き上げたようです。落下地点には基礎の鉄筋が上向きに何本も出ていて、その鉄筋に突き刺さったような状況だったようです。急遽鉄筋を切断し即死の死体を収容したのですが、その陣頭指揮をしたのが T 班長だったのです。T 班長は、「係長、俺を日本に帰してくれ。日本ではどんなことでもするが、ここはだめだ。俺には合わない。かえしてくれ！」と涙声で訴えるのです。私は、「何を言っているのだ。弟さんも 1 年間立派に務めあげたではないか。兄貴のお前ができないことはない」と父親ほどの大男に真剣に説得の言葉をかけますが、説得力がありません。しばらくの押し問答と沈黙の後、若い下請けの作業員が、「班長、俺らを置いて行かないでくれ！ みんな同じ気持ちだ。班長がいないと困るんだ」と泣きながら話しました。「うん、うん」とうなずいていた班長は、しばらくして突然立ち上がって二人で朝もやの中を帰って行きました。遅くなってベッドから起き上がった私は、現場での朝礼と準備体操の真っただ中に入って行きました。班長、若者とも何もなかったように整列して、元請け会社からの指示を受け現場に向かって行きました。

このことがあって、これはすぐにはラゴスに帰ることはできない、もう少し滞在する必要があるなど判断しました。サイトの 2 日目は慌ただしく始まりましたが、私には大きな仕事が残っています。事故報告書を東京の本社に発信しなければなりません。

当然当事者間の補償、事故責任と損害賠償がこれからの大きな問題になってきます。当時はラゴスとも短波の電話で話している状況で、簡単に日本との連絡はできません。紙のテープに丸い穴を開け、それを読み取っての通信手段になります。郵便局では電信欄にローマ字で箇条書きに極力簡単にまとめましたが、ローマ字の文章ですから書くにも読むにも時間がかかります。結局次のような文章をローマ字で送りました。

①当社の運転手の経験不足が大きな原因の事故であること、②ご遺体は成田から函館に向け再度送られるが、成田には役員クラスがお迎えして欲しいこと、③現地での警察の判断が今後の状況を決定づけること、などでした。

日本への事故報告も済み、警察の処分を待つだけになりましたが当然早急には結果は発表されません、とのことでした。噂は飛び交いますが、決定的なものはありません。当社のクレーン運転手は事故の当事者として神妙に警察の処分を待っていました。日本では、起訴するのかどうかは 1 か月くらいかかります。そんな待機中、思いもよらず突然に事故に対する見解が発表されました。事故から 5 日目、私が現地に来て 4 日目です。元請けの安全担当者が至急とのことで警察に呼ばれました。警察では事故に対する考え方、見方を説明され比較的早い時間で帰ってきました。すぐに私も含め関係会社の方々が安全管理室に呼ばれ説明を受けました。が簡単なものでした。ナイジェリアの警察の見方、判断は次のようなものでした。「ゴンドラには 4 人乗っていて一人が転落したというのは、本人の不注意から起きた事故である」とのことでした。少なくともナイジェリアでは、理不尽でも死亡した本人の責任として決着したわけです。運転手の未熟な操作、安全ベルトの不使用などいくつかの問題点は不問になってしまいました。現場の工事も何もなかったかのようになり、又事故現場のプラントでも工事は再開されました。また郵便局から本社に向け事故は当社に起因するものではないとの警察の判断であったことを打電しました。この国では交通事故でも犯人を捕まえられない警察ですからこうした判断で済んだのでしょう。PM 他関係者全員胸をなでおろしたことと思います。

(続く)